

メッセージアウトライン マタイの福音書6：9～10 「主の祈りⅠ」

6章9節から13節は「主の祈り」としてよく知られているところである。これはイエスが弟子たちに、教えられた祈りの神髄とも言える箇所であり、教会の礼拝でも欠かさず祈る祈りである。短いことばであるがその内容は非常に深い。この「主の祈り」は前半と後半の二つに分けられる。前半は9～10節で神に関することの祈りであり、後半は11～13節で私たちに关する祈りである。今日はその前半に関して学びたい。

[9-10]「ですから、あなたがたはこう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名が聖なるものとされますように。御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行われますように。』」

「ですから」という言葉で分かるように、このイエスの教えられる祈りはその前の6:5-8節の「祈るときはどのように祈るのか」という箇所を受けて展開されているところである。

イエスがこの祈りを弟子たちに教えられた時、神に関する祈りをまず先に持って来られたのは偶然ではない。イエスは祈る順序をご存じであった。ここで私たちは自分自身のことや自分の必要を祈る前に、神の偉大さ、神の栄光、神の威厳といったことに大きな関心をもって祈らなければならないことを教えられる。

「天にいます私たちの父よ。御名が聖なるものとされますように」(9)

ここでは「天にいます私たちの父よ」と非常に簡潔な神への呼びかけで始まっている。イエスご自身も神への呼びかけは「父よ」という短いことばであった。→マタイ11:25, 26

また「アバ、父よ」とも呼びかけられ、初代教会の信者たちも同様に「アバ、父よ」と祈りを始めている。→マルコ14:36, ローマ8:15, ガラテヤ4:6 「アバ」とは子として、父に対する呼びかけを表すための幼児語から転用された言葉で、「お父さん、お父ちゃん、パパ」などを意味する。

信仰者にとって父なる神に対する呼びかけは簡潔で直接的、単刀直入でよいことがわかる。しかし、それがいつしか生き生きとした信仰を失い、単なる形式的なお勤めになるとき、神への呼びかけは美辞麗句で飾り立て、深い瞑想の足りない分

をことば数で補うということになってしまう危険性がある。

その当時の祈りに次のようなものがあつた。「ほむべきかな、主、われらの神、我らの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、大いなる力ある恐るべき神、あわれみといつくしみを示したもういと高き神、万物の創造者、父祖との恵み深い契約を覚えて愛により、ご自身の御名のために救い主を子らの子に与えたもう者、王、助け主、救い主、盾、エホバよ、アブラハムの盾なるあなたは、ほむべきかな」これは非常に長く飾り立てた呼びかけである。

これに対して、私たちの信仰の歩みが常日頃神の前に謙遜で真実であるならば、神のあらゆる性質は「お父さん」「父よ」というただひとことの呼びかけで十分示される。それゆえ私たち、神の子どもとされている者にとっては「天にいます私たちの父よ」という呼びかけで十分なのである。

次に「御名が聖なるものとされますように」という言葉がくる。「名は体を表す」という言葉が一般でも使われているが、この場合の「御名」とは神ご自身を指す言葉である。「神」を表すことばはヘブル語では「ヤハウェ」（これは聖四文字と言われる）であるが、十戒の出エジプト記20:7また申命記5:11などには「あなたは、あなたの神、主の名をみだりに口にしてはならない。主は、主の名をみだりに口にする者を罰せずにはおかない」とあり、それゆえイスラエル人は「神」という言葉を「主(アドナイ)」と置き換えて読むようにした。新改訳聖書では太字の「主」で記されている。太字でない「主」は「主」を代名詞などで受けた場合かまたは通常の「主」を受けた言葉の訳である

イエスはここでは神を表す「御名」という言葉を使われ、それは「神が聖なるものとされますように」と同じである。つまり、神ご自身が、この神を知らない世界においてその聖さ、偉大さ、高さ、深さを知られ、あがめられ、崇拝されるようになりますようにという意味になる。

世の人々のほとんどは神を単なる思想上の産物か、人間と同等かあるいはもう少しましな存在に過ぎないと思っている。八百万の神、冠婚葬祭の時にお出まし願う神、崇りの神、苦しい時の神頼みの神なのである。それゆえ人々は神について非常に軽く考え、軽々しく神という言葉を使う。しかし、聖書を読むと神はそうに軽々しく扱われるお方ではないということが分かる。聖書の神は天地万物の創造者であり、聖なるそして義なるお方であり、万軍の主であり、岩であり、盾であり、また私たちを導き守る羊飼いであり、砦であられ、救い主であるお方である。

その他聖書にはありとあらゆる表現をもってこの神の偉大さが述べられている。この神の聖さ、偉大さを私たちがこの世においてあがめ、世に知らせていくことができるように、また世の人々が神をあがめ敬い、賛美し、礼拝し、ほめたたえ、感謝するようにとの願いも込められている。

主の祈りは私たちが祈るときに、このようなことが私たちの第一の願いとならなければならないということを教えている。これはまた「まず神の国と神の義を求めなさい」(マタイ6:33)という教えにもつながるものである。

次に来る祈りが「御国が来ますように」(10)である。「御国」とは神が主権をもって支配され治められる国のことであり、それはこの地上のどこかで建国される国のことではない。イエスはルカ17:20-21でパリサイ人たちの質問に答えて、「神の国は、目に見える形で来るものではありません。『見よ、ここだ』とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです」と教えておられる。すなわち、神の国は自分の罪を悔い改めて神を信じる者の心の中に来るのである。→マタイ3:2、4:17 またこの神の国は世の終わりの時、終末の時に目に見える完全な形で実現することになる。→ヨハネの黙示録21章

私たち信仰者は世の人々が神の前に自分の罪を認め、悔い改めてイエス・キリストを救い主と信じて神の支配される神の国に入る者となるように祈らなければならないのである。

「みこころが天で行われるように、地でも行われますように」(10)

この祈りにおいては、まず天においては神のみこころは完全に行われていることを教えられる。

しかし、最初に創造されたアダムの堕落以来、この地上においてはそうではない。この世界はサタンの支配のもとにあり→ヨハネ12:31、14:30、16:11、使徒26:18 神の前に罪ある人間はそのサタンの支配下にあつて神に逆らい、この世も悪の力が働いている。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに生みの苦しみをしている。→ローマ8:22 そのようなこの地上において完全な神のみこころが行われますようにと願いなさいとイエスは教えられるのである。神はこの世界が罪と悪に満ちているので、ご自身のみこころを行うのを控えられ、あるいは愛想をつかして突き放されるのであろうか。そうではない。神は罪に満ちたこの世界と人間を見捨てられ、滅ぼされることをせず、なおも愛されご自身のひとり子イエス・キリストをこの世に人としてお送りくださった。まことに神は愛なるお方なのである。そしてこのイ

エス・キリストはこの地上で救いの福音を宣べ伝えられ、ついに私たちが神から受けるべき刑罰の身代わりに十字架にかけられ、死なれ、三日の後に死より復活され、私たちの罪を贖ってくださったのであった。→ヨハネ3:16

神のみこころが天において行われるように、罪と悪に満ちたこの世においても、なりますように祈りなさいというのがイエスの教えである。

さまざまな苦しみの中でがんじがらめになっている人、病の中にある人、罪深い生活から立ち返ることができず悲しみとうめきの中にある人、真の神を知らず空しい日々を送っている人……。

そのようなこの地上の世界において神のみこころがなり、最善がなりますようにと祈り続けなければならない。

主なる神は全知全能のお方であり、不可能を可能に変えることのできるお方である。誰もそれを止めることはできない。

→ダニエル4:35「この方は、天の軍勢にも、地に住むものにも、みこころのままに報いる。御手を差し押さえて、『あなたは何をされるのか』と言う者もない」

主は最悪から最善を生み出すことのできるお方である。

→ローマ8:28「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画に従って召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています」

私たちも日々の祈りにおいて、この世で、この地上で、全能のそして、愛であり聖である神の御名があがめられ、みこころが天で行われるように、この地上でも行われますようにと祈り続けることが大切である。